

ESD/ユネスコスクール東北コンソーシアム 第2回学び合いセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

◇開催日時 2018年8月3日(金) 12時30分～

◇会場 宮城教育大学

◇参加者 約30名

◇趣旨

東北地方コンソーシアムで構築したネットワークを活用して、ESD・SDGsをテーマとした学校と地域の連携の学び合いの機会とする。第1部は学校と地域の連携の代表として気仙沼の事例を紹介する。第2部は学校教育における教材開発、第3部は中国の事例を紹介する。

◇内容

1. シンポジウム『ESD/SDGsを実現する地域づくりについて』

(1) 基調講演『気仙沼地域の円卓会議方式について』講師：及川幸彦氏(東京大学)

①構築までのプロセス 2002年から

日米教育委員会日本フルブライトメモリアル基金による地球探索型環境教育の推進

ウィスコンシン州との連携(アメリカの環境教育の中心地)

行政・リンカーン小学校・ウィスコンシン大学

→ 日本側も同じようなシステムを作ろう

戦略の構想

ESD/ASP国際フォーラム等を開催した経験

ユネスコスクールへの加盟

RCEによる連携体制・推進委員会の構築 → 気仙沼ESD円卓会議へ

2002年アメリカとの交流への対応を主目的としたプロジェクト会議としてスタート

2004年気仙沼環境教育推進会議として市全体に広げる(円卓会議)

2006年RCE指定

2010年円卓会議

2012年ユネスコスクール地域交流会(円卓会議の全国バージョン): 震災後の気仙沼を発信する

2013年気仙沼ESD円卓会議のリスタート

②仕組み・枠組みについて

小・中・高等学校・大学・教育委員会、NPO、ユネスコ協会、メディア、海外ゲスト

6つの戦略

- ・知識ベースとなる地域・大学・専門機関との連携の構築
- ・小・中・高等学校の縦の連携・交流による系統的な実践
- ・他地域・海外との共同学習による地球的視野の育成
- ・ICTの活用
- ・地域に根差した探究型学習プログラムの開発と実践
- ・国際理解教育の推進

施策の実際

○多様な主体が参加するESDの授業づくり

- ESDカリキュラムの開発
- 面瀬小の知識ベースプロジェクトの構築（学校を中心としたネットワーク）
 - 大学・専門機関との連携・授業づくり
- 授業実践を通じた縦の連携・交流学习
 - 小学校：自然への感受性・生命への畏敬 → 遊び・体験学習・自然とのふれあい
 - 中学校：環境への知性・環境倫理 → 探究学習・活動・コミュニケーション
 - 高校：地球市民行動の技術と経験 → 批判的思考・世界での活動の理解と交流

③目的：地域内外の多様な主体の参画と協働によるESDの学び舎の創造

ESDの火を面瀬から消さない。ESDの原点

- ・多様なステークホルダーの参加
- ・地域の課題に向き合う
- ・ESDの最新情報を学ぶ機会
- ・地域のESD実践の共有と課題の深掘り
- ・変化する課題や時代への対応

○最新の教育の動向やESDの情報を獲得し共有する

○地域のESD/SDGsの実践を学び合う

○ESD（人づくり）の観点から時代の地域課題を議論し、方向性を共有する。

→ 教員のカリキュラム開発力の育成に好影響、教員の視野が広がった

学び合いによる教員の意識改革（次世代を生きる子どもに必要な力量のために必要なものは？）

教員自身の学ぶ力の育成につながった

個人のための教育から、地域や世界のための教育への変革をもたらした

(2) 只見町教育委員会教育長 渡辺早苗氏

ESDは地域の課題解決に貢献する人材を育成する教育

少子高齢化の解決

子どもたちに地域のよさを伝え、つないでいく 自尊意識・地域アイデンティティの育成

只見面白学・只見検定

伝統芸能の継承

自然環境を学ぶ ユネスコエコパークの利活用 豪雪・豊かな水・ブナ林

海洋教育を取り入れることで水の循環など広い視野の学びへ

発信 住みたくなる街づくり

(3) 大崎市世界農業遺産推進課 鈴木耕平氏

21ヵ国52地域（国内11地域）

大崎地域（大崎市・色麻町、加美町、湧谷町、美星町）

流域的な取り組み・水の管理に苦勞した地域

屋敷林「居久根」と水田、水路が織りなす豊かな生物多様性

世界農業遺産の推進はSDGsのゴールに向かっていくことと同義
持続可能な農業を応援するシステム

経済的自立 農産物認証制度 営農方法に対する評価
生きもの認証制度 配慮を模索する農業者等の取組に対する評価

農文化の保全と発展

世界農業遺産が学校教育に生かすための副読本の作成

- (4) 杜の都市環境教育・学習推進会議副委員長 高橋悦子氏
震災で失われた居久根の再生（冬の北風から家や集落を守る）
海岸林：潮を含んだ海風や砂の飛散を防ぎ、農作物や暮らしを守る

2. 学校実践検討会『重点地域からの学校実践報告』

- (1) 気仙沼市教育委員会 小野寺裕史氏

唐桑幼稚園 唐桑の海の魅力の発見 散策と人との出会い 絵や身体表現、ごっこ遊び
もっと海が好きになる 目標 14

30年度は「唐桑大好き」 目標 11

面瀬小学校 山川里海の命の源 水源地の見学、未来に残そう生物多様性
海洋教育 海の豊かさ、海を利用しながら海を守ることの大切さを学ぶ

大谷中学校 ハチドリ計画

ウニに焦点化した環境教育、ふゆみずたんぼ

- (2) 只見町立朝日小学校 木戸裕治氏

つながりの中で「只見愛」を育みながら学び続ける子どもの育成を目指して 只見町ブナセンター
自然が豊かという漠然としたイメージ

ブナセンターとの連携による自然環境の構造的理解

- (3) 宮城ESD研究会 遠藤宏紀氏

- (4) 古川学園高校 蛭名郁矢氏

総合的な学習の時間 学年わくをなしにした講座開講制
生き物調査

バランスが悪いところ その理由・改善策を考える

体験で終わらせずに考察まで

- (5) NPO法人田んぼ 岩淵成起氏

田んぼの生き物を考える 5000種以上

生物多様性の評価軸をつくる 土の評価

仲間としての3つのグループ

ちよūdい量の有機物を入れると生き物は増える

歴史的な風景

生き物調べの結果を通して、生物が豊かになるように対応する

3つの指標

農薬の指標

土づくりの指標

風致の指標（ランドスケープの指標）

歴史的な知恵、ローカルコミュニティ、強靱な社会 この3つが大切

体験学習とE S Dの違い（長友）

- ・地域課題の解決というプロセスの学び
- ・学びの連続性
- ・先につながっていくところ
- ・ローカルな課題がグローバルな課題につながっているところ
- ・体験学習はひとつの方法 体験を企画させるところから考えさせる（与えられたものではなく）

◇内発性に駆動された学び